

FLORA KANAGAWA

Apr. 4. 2004 No. 57

神奈川県植物誌調査会ニュース第57号

〒250-0031 小田原市入生田499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846

e-mail katsu@nh.kanagawa-museum.jp

郵便振替 00230-5-10195



ハマボウ. 詳しくは本文708ページを参照.

河津英子:北限のハマボウ	708
青木清勝・平野素・秋山守:カゲロウラン葉山町二子山に産す	708
勝山輝男・歌川道子:ノレンガヤが横須賀市に一時帰化していた	709
平川恵美子・勝山輝男:ヤマサギソウの再発見	710
逢沢峰昭:箱根産のネズミサシ標本について	711
勝山輝男:神奈川県新産の植物	712
金子紀子:コセンダングサの筒状花	712
松本雅人:上瀬谷の帰化植物	713
木場英久:神奈川のチシマゼキショウ属	714

北限のハマボウ

(河濟英子)

ハマボウ *Hibiscus hamabo* Siebold & Zucc. はアオイ科フヨウ属の落葉低木で、『神奈川県植物誌2001』p.992には「県内では三浦半島の天神島が唯一の自生地、日本列島の分布の北限となって・・・(中略)・・・神奈川県指定の天然記念物に指定されている。」とある。ところが、「花ごよみ2003」の調査中、多摩川河口(川崎市川崎区殿町2丁目)に生育していることを発見したので報告する(表紙写真参照)。

河口のハマボウは、オギ、アイアシ、クズの群落と、満潮時には海水がおよぶ汀(みぎわ)との間の砂地に1株のみが確認できた。ハマボウは庭園などに植栽されることもあるが、付近の環境からこの株は種子の漂着による自生と判断される。高さ1.5~2m程の幹は基部で数本に分枝し、7月中旬から9月上旬まで枝先に径6cm程の黄色い花を次々開花し続けた。9月下旬に観察した時点で約150個ほどの未熟な果実を付け、11月中旬にはほぼ全てが熟して枯れ落ちた。

枝の太さからみて、1996年から数年間の分布調査期間にはすでに発生していたと思われるが、見逃されていたらしい。葉が十分に展開する頃には既にオギの陰になり、開花する季節にはクズに完全に覆われて草地からも土手のサイクリングロード付近からも目に映らない。大潮の干潮を利用して、殿町3丁目から1丁目の大師橋下まで汀を歩いてみたが、他には見つけれなかった。

殿町の河口河川敷は国土交通省京浜河川事務所管理のもと「多摩川生態系保持空間」に指定されており、「植物の採取など、自然に手をつけることはしないでください。」と表示されている。しかし、3月には焚火の失火によるヨシ原の火災があり、6月以降毎月行われる除草に加えて、夏休みには干潟の生物観察会の親子参加者の通行の邪魔にされ、枝数本が折られるということもあり、この数ヶ月間この一本をヒヤヒヤもので見守ってきた。

『千葉県主要種子植物チェックマップ1997』には外房の白浜町、和田町の海岸に標本記録があるが、内房には無い。おそらく、これが東京湾内では初めての記録となり、列島での北限が35km程北に移動したことになる。

なお、開花時の標本を県立生命の星・地球博物館に2点収めた(KPM-NA0123693, 0123694)。

カゲロウラン 葉山町二子山に産す

(青木清勝・平野素・秋山守)

カゲロウラン(写真)が2003年9月7日、神奈川県植物調査会・三浦ブロックの合同調査のとき、葉山町二子山系の一角で見出され、神奈川県下では横須賀市長沢につぐ第2の産地であり、二子山系では初発見である。

カゲロウラン *Hetaeria agyokwana* (Fukuy.) Nackej. は福山伯明先生が台湾・台北近郊の烏来の奥に位置する阿玉山を基準産地として1934年に発表された常緑性の地生ランである。このランは南西諸島が本拠とみられ、島嶼やおもに沿岸地に接する常緑広葉樹林の林床に生え、個体数が少なく、環境庁がまとめた日本の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックでは絶滅危惧Ⅱ類(絶滅の危険が増大している種類)とされている。また、都道府県別分布状況では千葉・東京・神奈川県・静岡・和歌山・愛媛・高知・宮崎・鹿児島・沖縄の各県に自生が記録されているが、生育地は少なく稀な種類である。今回、発見された自生地は尾根筋のスダジイ、オオシマザクラ、シロダモ、エゴノキ、スギの高木の林下にアズマネザサが優占する群落内にアオキの実生苗、ナガバノジャノヒゲ、サイハイランが生える約50mの間に1個体しかみられないのが10ヶ所、2個体が1ヶ所、3個体が



2ヶ所, 4個体が3ヶ所, 7個体が2ヶ所, 8個体が最高で1ヶ所と散在し, 合計で約52個体が確認できた。

参考文献

- Fukuyama, N., 1934. *Studia Orchidacearum Japonicarum* Bot. Mag. Tokyo. 48: 433.
- 中島邦雄, 1971. 琉球産ラン科植物目録(琉球の野生ラン写真集)I. 61pp. 琉球の野生ラン刊行会, 那覇.
- 初島住彦, 1971. 琉球植物誌. 833 pp. 沖縄生物教育研究会, 那覇.
- 初島住彦・天野鉄夫, 1977. 琉球植物目録. 282 pp. でいご出版社, 那覇.
- 初島住彦, 1978. 鹿児島県植物目録. 234 pp. 鹿児島県植物同好会, 鹿児島.
- 山中二男, 1978. 高知県の植生と植物相. 461 pp. 林野弘済会高知支部, 高知.
- 平田正一, 1984. 宮崎県植物誌. 377 pp. 宮崎日々新聞社, 宮崎.
- 高橋勝男, 1985. 野生ランのおもしろ講座. 172 pp. 毎日新聞社, 東京.
- 正宗厳敬, 1987. 日本の自生蘭 写真と図IV. 69pp. 自費出版.
- 星 寛治, 1997. 三浦半島で発見されたカゲロウラン. *Flora Kanagawa*, (44): 491-492.
- 環境庁編, 2000. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物. レッドデータブック 8 植物I(維管束植物)2000. 660pp. 財団法人自然環境研究センター, 東京.
- 台湾植物誌編輯委員会, 1978. 台湾植物誌V. 1166 pp. 現代関係出版社, 台北.

ノレンガヤが横須賀市に一時帰化していた

(勝山輝男・歌川道子)

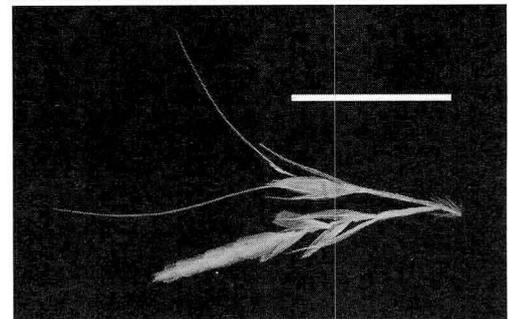
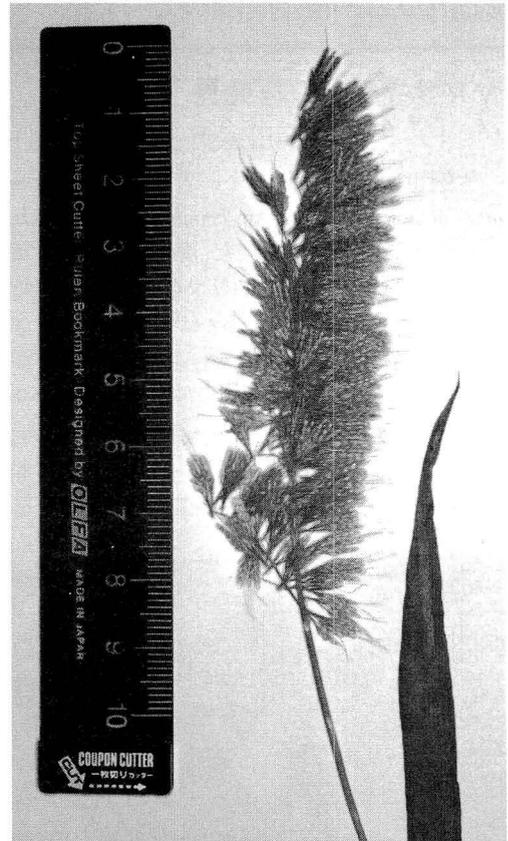
地中海地域原産のノレンガヤ *Lamarckia aurea* (L.) Moench (イネ科) が1999年に横須賀市に一時帰化していたことがわかったので報告する。

筆者の一人歌川のもとに, 友人から東京都江東区木場の帰化植物見本園に植えられていたイネ科の不明植物の標本が持ち込まれた。以前に別の友人がイスラエルのガリラヤ湖畔で採集した標本と同じ植物だったので, *Flora Palaestina* で調べたところ本種と判明した。帰化植物見本園にどこから持ち込まれたのか友人に確かめたところ, 意外

にも1999年に横須賀市の浦賀駅近くの路傍に生えていたものを移植したとのことであった。

一方, 国立科学博物館に提出されたイネ科帰化植物の不明標本の同定を勝山が引き受けていたが, その中に蓮見和子氏が横須賀市で1999年5月12日に採集されたノレンガヤの標本が含まれていた。現在, 浦賀駅周辺からは失われたらしく, 一時帰化にすぎないが, 証拠標本が発見されたので, 日本新産として記録に留めておきたい。

和名のノレンガヤは牧野・根本(1931. 訂正増補日本植物総覧)に栽植として簡単な記載とともに



ノレンガヤ. 上: 花序, 下: 小穂群. 上の芒のあるのが登実小穂, 下は不稔小穂(スケールは5mm).

掲載されていた。ノレンガヤ属は1種のみがあり、イチゴツナギ連に属し、登実小穂と不稔小穂があることからクシガヤ属 *Cynosurus* L. に近いと思われる。以下に簡単な記載を記しておく。

1年草で高さ10-40cm。花序は長さ2-8cmの円柱状で、総状に多数の小穂を片側に偏ってつける。1個の登実小穂と2-3個の不稔小穂がかたまってくる。登実小穂は長さ3-4mm、苞穎2個は同形で狭披針形で長さ3-4mm、第1小花は登実し、第2小花は芒のみに退化。登実小花の外穎は長さ約3mmで長い芒がある。不稔小穂は線形で長さ5-8mm、数個から10数個の空の外穎がある。

ヤマサギソウの再発見

(平川恵美子・勝山輝男)

川崎市麻生区でヤマサギソウ *Platanthera mandarinorum* Rchb.f. var. *brachyentron* (Franch. & Sav.) Koidz. が見つかった。現地は定期的に草刈りされる草地(芝地)で、カリマタガヤ、ミノボロ、コケリンドウ、ヒゲシバ、イトハナビテンツキ、ウシクサなど、古くからの植物が生育している貴重な場所である。多摩丘陵にはよく似たトンボソウやオオパノトンボソウがあるが、5月12日にすでに開花していたのでおかしいと思い、調べたところ本種であった。平川が花ごよみ調査で定期的に足を

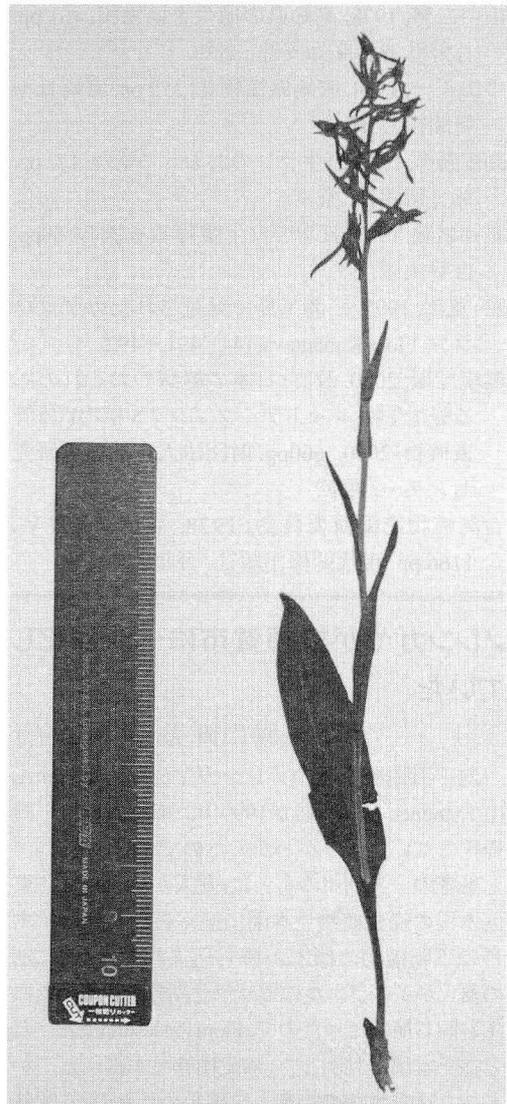


運んでいる場所で、花ごよみ調査の嬉しいおまけとなった。

葉は1個が大きく、その基部は茎に対して斜めにつき、キソチドリやナガバキソチドリのように茎に直角について強く茎を抱くことはない。背萼片は広卵形で、距は後方に曲がり上方には立たない。マイサギソウ var. *neglecta* (Schltr.) F. Maek. は距が上方に立ち、背萼片の先が円い。

県内では「神植目33」に箱根・横浜、「神植誌58」に丹沢・箱根、「横植誌68」に瀬谷区・旭区を記録しているが、その後の調査では採集されておらず、「神植誌01」では絶滅種として掲載された。なお、マイサギソウは箱根で写真に記録されている。

標本：川崎市麻生区 2003.05.21 平川恵美子 KPM-NA0123692.



箱根産のネズミサシ標本について

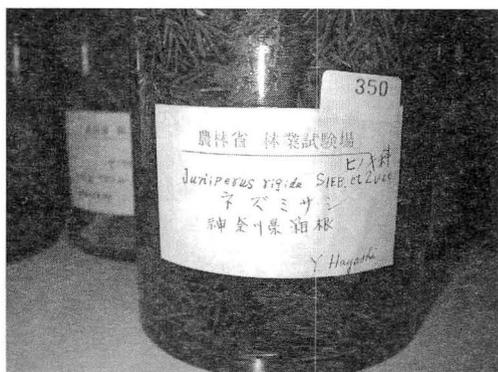
(逢沢峰昭)

神奈川県内のネズミサシ *Juniperus rigida* Siebold & Zucc. の分布は、1987年に同県藤野町葛原で幼木が採集されただけであり、自生かどうか定かでない鎌倉や逗子神武寺のものを除けば、これ以外の地域ではこれまで確認されていない(松浦1958, 神奈川県植物誌調査会編 2001)。

筆者は昨年、森林総研多摩森林科学園(TFA)の標本庫を再度閲覧した際に、故・林弥栄氏によって採集された箱根産のネズミサシ標本を発見した(写真1)。しかし、この標本のラベルには「神奈川県箱根 Y. Hayashi」と書かれているだけで、採集日の記載はなかった(写真2)。そこで、林氏が採集した箱根産の標本ラベルで、かつ採集日の付記された標本を探してみたところ、標本ラベルには「箱根」、「箱根 湯本」および「神奈川県箱根」の3種類のラベルがあることが判明した。そのうち「神奈川県箱根」の標本ラベルは、いずれも「1964.6.10」と記載されていた。したがって、このネズミサシ標本も1964年6月10日に採集されたものと推察された。また、林(1960)には本種の産地に箱根の記載は見られないが、林(1969)の分布図には箱根付近に分布点が見られる。上記の採集日が正しいとすれば、この分布点は、今回発見された標本に基づいて印された可能性がある。ただ、他の文献も調べてみると、シーボルト著「Flora Japonica」の翻訳本(シーボルト著、瀬倉訳 1996)には、「ツェンベルク氏と私は、北緯35度10分、東経138度50分*の箱根の山中でネズミサシを見つけた」とあり、さらにFlora Japonicaの「図版に描かれたネズミサシは、ツェンベルク氏が箱根の山中で採集し、同氏が長崎奉行所の高官であった、茂伝之進の父の庭園に植栽したものである」との具体的な記載が見られる。したがって、このシーボルトの記述や今回発見された標本は、かつて箱根山中にネズミサシが分布していたことを物語っていると考えられる。

最後に、度重なる標本閲覧を快諾してくださった、森林総研多摩森林科学園の勝木俊雄氏に心よりお礼申し上げます。

注)*現在のこの緯度経度は、箱根から20kmほど西の愛鷹山の南斜面を指している。これは当時の地図における精度上の問題であろう。



上:箱根産のネズミサシ(液浸標本),下:標本ラベル

引用文献

- 林 弥栄, 1960. 日本産針葉樹の分類と分布. 194pp. 農林出版, 東京.
- 林 弥栄, 1969. 有用樹木図説(林木編). 427pp. 誠文堂新光社, 東京.
- 神奈川県植物誌調査会編, 2001. 神奈川県植物誌2001. 1584pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 松浦茂寿, 1958. 箱根植物目録. 箱根博物会.
- シーボルト P.F. 著(大場秀章監修・解説, 瀬倉正克訳), 1996. 日本の植物. 296+7pp. 八坂書房, 東京.

神奈川県新産の植物

(勝山輝男)

『神奈川県植物誌2001』が出された後にも、神奈川県新産や再発見の植物が見つかっている。それぞれ、発見された方や同定された方がフロラカナガワに報告しているが、県博に提出されたもので、まだ報告されていない神奈川県新産の帰化植物がいくつかあったので、この機会に紹介しておく。

1. マドリードチャヒキ *Bromus madritensis* L.

標本: 相模原市(SA-1)田名 塩田 2003.04.09 松本雅人 KPM-NA0123332 & KPM-NA0123333

文献: 勝山, 2003. イネ科スズメノチャヒキ属. 日本の帰化植物. 平凡社. pp.262-267.

2. コケイラクサ *Soleirolia soleirolii* (Req.) Dabdy; *Helxine soleirolii* Req. (イラクサ科)

標本: 横浜市保土ヶ谷区星川 2003.08.06 吉川アサ子 KPM-NA0123591

文献: 森茂弥・城川・勝山・高橋, 1993. スミレもタンポポもなぜこんなにたくましいのか. PHP出版. pp.174-176.

3. ダツタンソバ *Fagopyrum tataricum* (L.) Gaertn.

標本: 横浜市瀬谷区 上瀬谷 2003.05.08 松本雅人 KPM-NA0123407

文献: 長田, 1972. 日本帰化植物図鑑. 北隆館. p.183.

4. ルリハツカ *Amethystea caerulea* L.

標本: 横浜市瀬谷区 上瀬谷 2003.05.12 松本雅人 KPM-NA0123410

備考: 本州～九州, 朝鮮, 中国に分布する植物で, 中国産の土壤改良剤を投入した畑地に発生したもので, 中国から持ち込まれたものと推定される。

5. イチゲフウロ *Geranium sibiricum* L.

標本: 横浜市瀬谷区 上瀬谷 2003.07.31 松本雅人 KPM-NA0123698

備考: ヨーロッパ, シベリア, 中国, 朝鮮, ヒマラヤに広く分布する植物で, 日本でも北海道と本州(青森県)に自生する。中国産の土壤改良剤を投入した畑地に発生したもので, 中国から持ち込まれたものと推定される。

コセンダングサの筒状花

(金子紀子)

コセンダングサ *Bidens pilosa* L. var. *pilosa* を観察していたら, 1つの頭花の中に, 花冠裂片の上に葯筒がほとんど全部見えるほど高く突き出した

もの(以後, 「高いタイプ」と、花冠裂片と葯筒の先端がほぼ同じ高さにしか伸びないもの(以後, 「低いタイプ」)の2つのタイプがあるのに気がついた。また出現率は低い雌花もあることがわかったので, これらについて紹介する。

2つのタイプについて

コセンダングサは, 雄性先熟であるが, 雌性期に入り柱頭が平開するころになると, それ以上葯の高さは変化しない。「低いタイプ」では平開した柱頭は花冠にぶつかってしまい, 平開した状態とまる。一方, 「高いタイプ」では, 花柱が長く伸びて花冠との間に余裕があるので反転する。「高いタイプ」が「低いタイプ」になったり, その逆は起こらないようである。

全ての筒状花が雌性期になった頭花を選んで, 「高いタイプ」と「低いタイプ」の小花数を調べてみた。1つの頭花の中の筒状花数は21～62個と非常にまちまちであり, 「高いタイプ」の割合も0～46.15%と幅広く, さらに1頭花中の筒状花数の多少と2つのタイプの割合には相関がないように思われた。同一の個体に付く花にも「高いタイプ」が多いものと少ないものが混在するので, 遺伝的に葯の高低が生じているようではなかった。

「低いタイプ」の花糸のたわみ

「低いタイプ」では, どのような仕組みで花冠裂片と葯筒の先端がほぼ同じ高さにしか伸びないのかを観察してみた。すると, 雄しべ全体が短いのも, 花糸が短いのもなく, 花糸が極度に曲がっていたのである。

キク科の筒状花では, 送粉昆虫が訪れると葯筒が少し沈んで雌しべの集粉毛が花粉を押し出す現象が知られている。この現象はアザミの仲間やツワブキなどの比較的大きな筒状花では人が軽く触れただけでも花粉が出てくるほど顕著であるが, コセンダングサのような小さな筒状花であっても, 微量ながら同様の仕組みで花粉を出す。従って花糸のたわみは, 昆虫に押さえつけられた時に葯筒を沈めるパネの役目を果たしていると思われる。

ところが, 「低いタイプ」では, なぜか柱頭が伸びずに, 虫が来たわけでもないのに, 花糸がはつきりと曲がっているのである。雌性期に入り柱頭が平開よりやや下に反り返った時期に花糸の形状を比較すると, 「高いタイプ」の花の花糸は, たわみはあるが, 花柱から少し離れている程度である。それに対して「低いタイプ」の花の花糸では, たわみが大きく, 葯の付け根より上まで一度持ち

表1. 葯が高い小花の割合

調査日	頭花数	雌花のある頭花数	筒状花総数	雌花数	葯が高い花数
11月4-22日	33	5(15.15%)	1475	8(0.54%)	302(20.47%)
11月27-28日	24	9(37.50%)	1142	21(1.84%)	182(15.9%)
合計	57	14(24.56%)	2617	29(1.11%)	484(18.49%)

上がってから下がり、葯の下部へと続いている。5本の花糸が大きくたわむため、花筒の内壁にぶつかり真っ直ぐに直ることが難しく、高く伸ばすことができないのだと思う。

また、雌性期に入ったばかりの柱頭の集粉毛に付いている花粉の量などをみると、「低いタイプ」の小花では、「高いタイプ」に比べて花粉の量が少ないようである。これは花糸が不自然に曲がっているため、葯に栄養分を送ることが出来ないためであろう。

コセンダングサの雌花について

小花の中には、葯が平坦で、両性花の葯のように焦げ茶色にならず、花冠と同色でやや半透明だが、花が枯れ始める時期に葯がやや焦げ茶になり、しおれてくるようなものがある。花粉を作らないようなので、雌花として機能していると思われる。観察した頭花の中にはほとんど雌花だけからなるものもみられた。

11月4～22日に33頭花、11月27～28日に24頭花を調べてみた(表1)。雌花は「低いタイプ」と同じく葯筒が花冠よから外に出ず、花冠裂片は4裂するものと5裂するものの2種類があった。雄しべの数も少なくなっていることが多く、花糸のたわみは少なかった。花筒下部の形は両性花に比べ円錐形に細まっていた。

気温が下がるにつれ、雌花が増える傾向が見られたが、春～夏に調べていないので現状では断言できない。

11月28日に雌花17個について雄しべの数を数えてみた。内訳は表2のようであった。

奇形花

今回調べた筒状花の中には、5個の奇形花があった。花冠裂片が12～18裂しているもの、柱頭

が2裂した雌しべが2本あるもの、雌しべは1本だが柱頭が7～8裂しているものなど5個の筒状花に異常が見られた。柱頭が多いものは雄しべ数も6～9本になっていたので、発生の途中で、2輪が癒合したのではないかと思う。これらの奇形花は花筒が通常より太くなるが多かった。今のところ雄花には出会っていない。

上瀬谷の帰化植物

(松本雅人)

野菜専業農家にとって堆肥は非常に大切なものである。土作りを重視し、つねに堆肥を施すことは、都市部の農家にとって大きな問題である。堆肥の原料をどうやって確保するかに苦心をしている。横浜市瀬谷区の上瀬谷のある農家は堆肥の原料として、もっぱら産業廃棄物の(ある食品メーカーの)大豆、小麦、ゴマ等を利用してしたが、近年、ソバガラ、とくにダットンソバのソバガラを利用するようになった。健康食として、ダットンソバが県内のそば屋等でみかけるようになった。もともとこの地の畑にはタンザニアのゴマ搾りかす、中国・アメリカの大豆搾りかす、カナダ・アメリカの小麦製粉かす等が使用され、複雑、難解な帰化植物が出現し、頭を悩ませていたが、ここにきて「内蒙古」のダットンソバのかすが入り、大混乱し始めた。

帰化植物といえ、すぐ国内最初、県内最初と騒ぐが、この地でははっきりと認識できる、むしろコスモポリタンな植物の帰化植物が気になるので記してみたい。

ナズナ、エノコログサ、タカサブロウ等、普通に覚えられる植物でも、この地のものは微妙に少しずつ違う。別種なのか亜種なのか変種なのか、種の範囲内なのか、複雑、難解である。まして、2、3年後には交雑がおこり不思議な世界が現れ、4、5年後には普通にもどる(のが観察された)or(と思われる)。明らかに内蒙古のダットンソバに伴い帰化したものとして次のものが確認された。

アオガヤツリ・アオゲイトウ・アキノエノコログサ・アキノノゲシ・アキメヒシバ・アフリカヒゲシバ・アメ

表2. 雌花の数性と雄しべの数

	雌花 総数	雄しべ				
		5本	4本	3本	2本	平均
4裂	7	0	0	4	3	2.57
5裂	10	1	2	5	2	3.20

リカアゼナ・アメリカセンダングサ・イガホビユ・イヌヒメシロビユ・イヌビユ・イヌホオズキ・イヌムギ・イノコヅチ・ウラジロアカザ・エゾスズシロ・エノキグサ・エノコログサ・オオクサキビ・オオニワホコリ・オナモミ・オヒシバ・オランダミナグサ・カヤツリグサ・カラシナ・カラスミギ・キクバアリタソウ・キクバフフロ・ギシギシ・キタメヒシバ・キバナスズシロ・ギョウギシバ・キンエノコロ・ギンセンカ・クジラグサ・クワクサ・グンバイナズナ・ケイヌビエ・ゲンショウコ・コアカザ・コオニタビラコ・コガネギシギシ・コスズメガヤ・コニシキソウ・コメヒシバ・ザクロソウ・ザラツキエノコロ・シャクチリソバ・シロザ・スカシタゴボウ・スズメガヤ・スズメノカタビラ・スズメノテッポウ・スベリヒユ・セイヨウオオバコ・セイヨウヒルガオ・センナリホオズキ・タカサブドウ・ダツタンソバ・タネツケバナ・タマガヤツリ・チチコグサモドキ・チャガヤツリ・ツボミオオバコ・ツルソバ・トウオオバコ・トキワハゼ・ナズナ(ホソミ型)・ニシキソウ・ニワホコリ・ノゲエノコロ・ノハラガラシ・ノムラサキ・ハコベ・ハチジョウナ・ハナイバナ・ハマガヤ・ハマネナシカズラ・ハリセンボン・ハリヒジキ(オニヒジキ)・ハリビユ・ヒメシロビユ・ヒロハフウリンホオズキ・ホウキギ・ホソアオゲイトウ・ホトケノザ・ホナガイヌビユ・マカラスムギ・マルバアカザ・ミチヤナギ・ムジナオオバコ・メヒシバ・モウコタンポポ・ヤハズソウ・ユウゲシヨウ・ルリハッカ(五十音順)

以上はダツタンソバ由来の堆肥をまいた畑やその近辺の道端から出たものについて、2003年1月～12月の一年間で観察されたもののうち、まれなものは省いて、ごく普通に見られるものをリストアップしたものである。また、在来の近縁種がある場合には、それと区別できたものだけを載せた。堆肥だけで見られ、畑や道端に見られないものは一時帰化と考え、カウントしていない。この他に国内最初と思われる種が相当数あるが、それらについては次の機会にする。

神奈川のチシマゼキシヨウ属

(木場英久)

ユリ科を研究されている大阪市立大学の田村実氏から、神奈川県産のチシマゼキシヨウ属植物 *Tofieldia* がハナゼキシヨウとされているが、これはチシマゼキシヨウではないかという指摘を受けた。

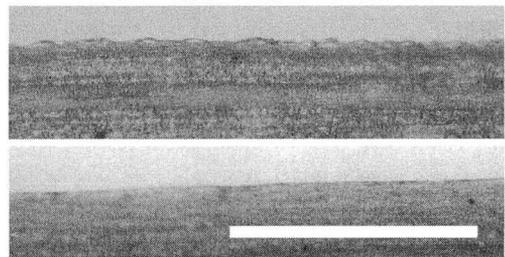
山崎(2002 JJB 77:299-303)は、チシマゼキシヨウ *T. coccinea* Richardson とハナゼキシヨウ *T. muda*

Maxim. とは、葉縁に微小な突起が密生するのがチシマゼキシヨウで、平滑なのがハナゼキシヨウとしている。葉縁の形質は「原色日本植物図鑑」(保育社)では検索表に使われており、「日本の野生植物」(平凡社)でも本文中に書かれている。県博にある神奈川県産の標本を見直してみると、すべて葉縁に細突起があり(図)、確かに種としてはチシマゼキシヨウであった。

さらに山崎(2002)は、本州の800～1500mの比較的低い山に生えるチシマゼキシヨウは、丈が高くなり、外観はハナゼキシヨウに似るが、葉の縁を見れば種としてはチシマゼキシヨウであることは明瞭であるとし、ハコネハナゼキシヨウはチシマゼキシヨウの変種 var. *gracilis* (Franch. & Sav.) T. Shimizu で、果時に花茎が10～25mm、花柄が3～5mmと長いことなどを検索表の形質にしている。この検索表によると県博の標本はハコネハナゼキシヨウに相当した。一方、ハナゼキシヨウは産地が限られ、関東では栃木県にヤシユウハナゼキシヨウが分布するだけだそうである。

言い訳をさせてもらえば、「日本の野生植物」の検索表では、花柄が開出し蒴果が下を向くのがチシマゼキシヨウとあるが、県博にある神奈川県産の標本はすべて花や果実が上を向いたり開出しているため、この検索表ではハナゼキシヨウに行き着いてしまった。チシマゼキシヨウという高山の岩場に生えている小さい植物のイメージが強く、ハコネハナゼキシヨウという名前から、ハナゼキシヨウに近縁ではないかと勘違いしてしまい、1988年の植物誌を踏襲してしまった。

標本: 山北町ユーシン(1956.9.5 大場達之 KPM-NA0022968), 玄倉(1998.8.25 増子忠治 KPM-NA0116797; 1982.8.5 勝山輝男 KPM-NA1071207; 1989.7.31 勝山輝男 KPM-NA1102216; 1992.10.16 高坂雅子 KPM-NA1105269), 南足柄市金時山(1999.7.7 勝山・蛭子・支倉 KPM-NA0115479)。



葉縁。上: 細突起があるハコネハナゼキシヨウ(KPM-NA0116797), 下: 平滑なヤシユウハナゼキシヨウ(同0053456)。スケールは1mm。